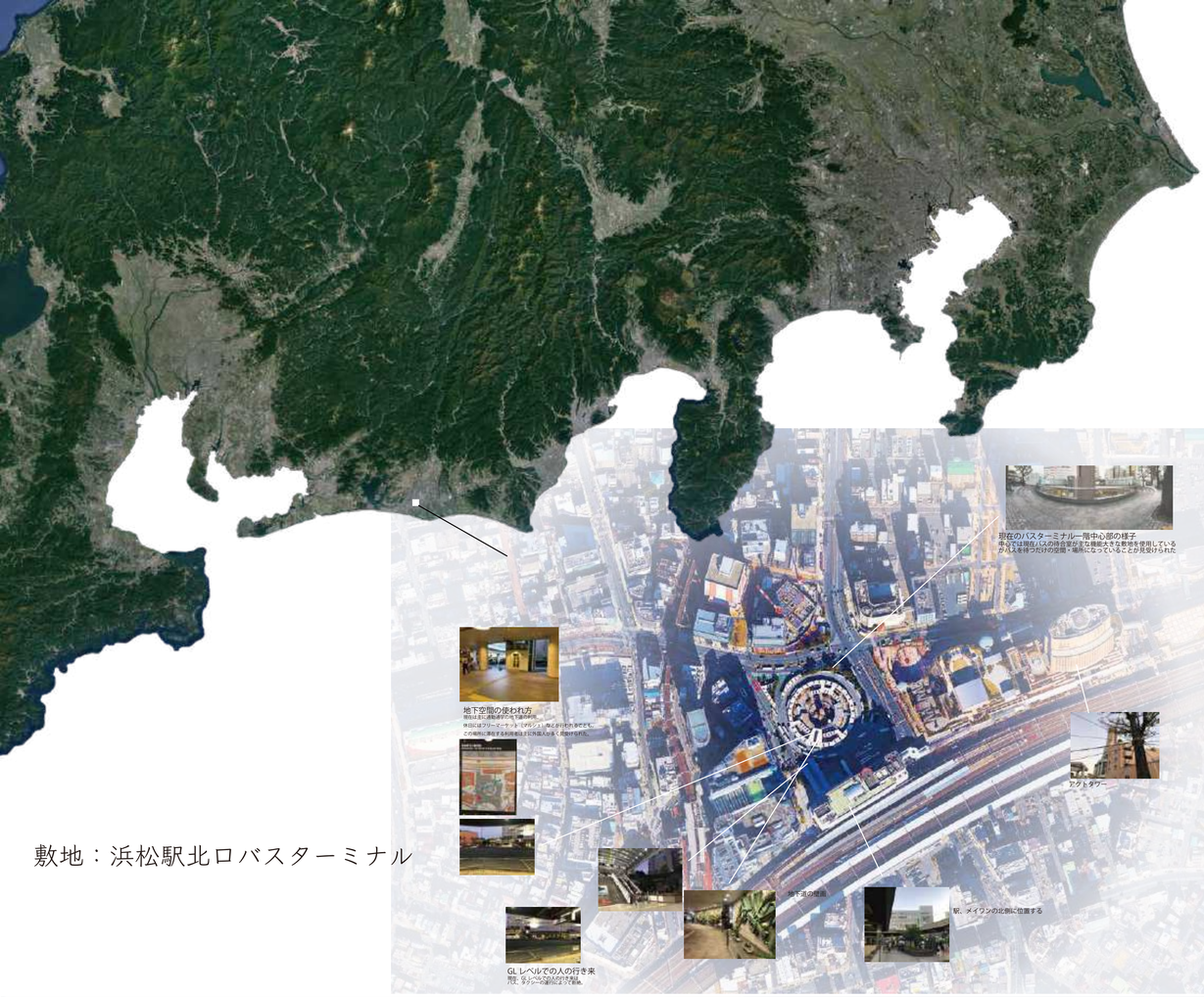
花紅柳緑

はなはくれない、やなぎはみどり

本来は「柳は緑花は紅」という禅宗の悟りの心境のことである。意味としては(広辞苑より引用)
自然のままで少しも人工の加わらないさま。また、物事に自然の理が備わっていることのたとえ。
という意味である。
また、禅語として柳は緑色、花は紅色。そのありのままの姿が真実だということ。全てのものを客観的に捉え、あるがままを受け入れようということを説いている言葉である。
そのような意味をもった言葉の前後を反転させタイトルに採用している。建築とは人工物であり花や緑とは相反する存在である。しかし、その人工物の豊かさによって見せる景色は自然の美しさに劣らぬものがあるのではないだろうか。



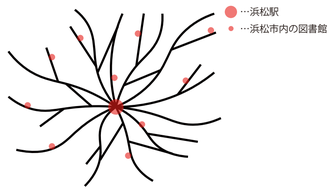
敷地：浜松駅北口バスターミナル

階層構造

階層構造によって生まれる照度などの違いから階層ごとの植物、そこに住まう虫や動物などの生き物にバラエティが生まれる、多様性が増してくる。つまり、環境（明るさや高度の変化、気温）など様々な要因によりその場所の特性、性質が決まることとなる。また、階層ごとに生物は完結するものではなくお互いに干渉しあいそれもまた互いに変化を与えていく。

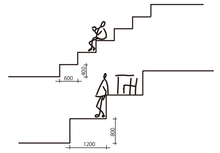
このように森林の中の植物における階層構造では生物に影響を及ぼし環境を創り上げる環境生成作用が働いていることがわかる。それでは、建築によって明るさ高度、気温に変化を起こしそこを使う人々の多様性を助長させ、さらにはその人々が干渉しあう、交流するような居場所は作れないだろうか。

図書の流動



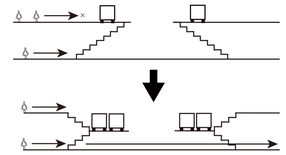
浜松駅周辺には図書館が少なく本を購入する本屋はあっても本を借りる施設が分室図書館しか存在しない。
そこで交通の弁がよく人の集まりが多い浜松駅に図書を設置することにより人々の図書への手軽さが増し、図書に触れやすくなるのではないかと考える。
また、浜松市では借りた図書は市内の図書館であればどこでも返却することが可能なので駅の図書館で借りて最寄りの図書館で返却することができる。人の行き来だけでなく本の行き来が行われるようになり、バスルートが知の動線となる。

コモンズの段差



動線である通路階段の寸法は踏面 300× 蹴上 200 で設計されている。通路階段とは別に踊り場（踏面 600× 蹴上 400、踏面 1200× 蹴上 800）を設け段のレベル差によって用途の特色を出すことができる。
・600×400
ベンチとして腰掛け休憩。
読書をする。
ステージの観客席。
・1200×800
軽く腰をかける。
机、椅子を設置しデスクワーク、一息。
以上のようにシーン用途によって色をだすことができる。

半地下バスターミナル



既存のバスターミナル地上レベルにバスが交通するため地上レベルでの駅とバスターミナルへの動線はなく人間が歩き利用することが出来ない。バスの利用方法としては、一度地下に潜りもう一度地上に登りバスターミナルに出るという動線計画が行なわれている。
それらの問題を解決するべく半地下にバスターミナルを配置する計画を考案した。半地下にすることによりバスが交通する以外の地上レベルの開放に加え、今まで利用されてきた地下空間も開放され続けることが可能となった。また、一度地下に潜ることによって分かりにくかった動線も地下からも地上からもアクセスでき、全方向からの行き来が可能となる。半地下にあることによって地上でも地下でもバスが視認しやすく利用のしやすさの向上も予想できる。

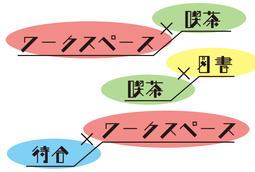
落葉・剥離

葉は落葉した時あたり一面を着色し彩を与えます。
その後、土へ還りまた樹木の栄養となって循環します。
はたまた、人間が集める、運ぶなどして活用されることも多くあります。
この植物がターンオーバーし自ら養分を循環するような仕組みを建築に置き換えて見ることができると私は考える。

植物は手入れを怠ると朽ちてしまい、手をかけただけ成長していくように建築も人間の介入がなくなると劣化し崩壊を始めるが丁寧に人間が手をかければ長期にわたって残されていくように建築も生き物であると私は考える。

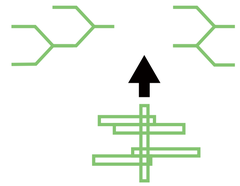
樹皮が剥がれるように葉が散っていき、新しい用途に様相を変化させるように建築も内側が変化することによってターンオーバーを起こし樹皮が剥がれ落ち、葉が落ちその落ちたものが新たな事象が起こしていると考えることはできないだろうか。
以上のように養分の循環を促し彩りを与え、新たな様相を見せる暖かい建築をつくれないか考えた。

×=COMMONS



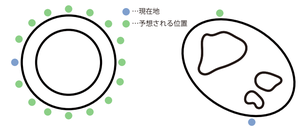
建築の用途としては、ワークスペース、喫茶店、図書、共有スペース、ステージ、コモンズ、バス待合室となっている。
しかし、機能は常に限定されているものではなくひとつの居場所が時代の流動、地域の需要に合わせて変容することを想定している。機能と機能をつなぐ間の階段スペースはコモンズとなっており、別の目的をもった人々が同じ空間に居合せる。静かな空間で本を読む人。物音がする場所で本を読む人。バスを待つ人。人を待つ人。コーヒーを飲む人。紅茶を飲む人。静かな空間でコーヒーを飲みながら本を読む人。など人の時間の過ごし方は様々である。
ありふれた時間の経過の中で様々な様子の人が居合わせることで新たな発見があるのではないかと考える。
固まった様相の中では新たな発見は難しく、アクセントがあることで今までにない体験ができる。

効率非効率



建築の動線はスラブとスラブを階段動線で繋ぎレベル差によって空間を区別している。スラブ一階段一スラブの一連は室であり、動線であるため目的の居場所に辿り着くにはやや非効率である。
（しかし、昨今の「便利」は余分なものを排除し目的のみを手に入れ満足してしまっていると感じる。それでは新たな発見ができず豊かな状態とは言えないのではないだろうか。本来の目的とは違う機能、居場所を通ることによって新たな発見がうまれ生活に彩を加えてくれるのではないだろうか。）
（よって、レベル差のある建物において最も有効な移動手段であるエレベータを設置。エレベータに対して目的機能に直通する通路を差し込むことで最短で目的を達成できる。通路とエレベータという一切の無駄を排除し目的の場所まで一直線で到着することができる。）
多様性が求められる現代、効率を求める人、非効率に迷い込んだ人、効率的な手段を意図せず用いた人、多様に変容をもたらす効率と非効率のコンプレックスである。

楕円バスターミナル

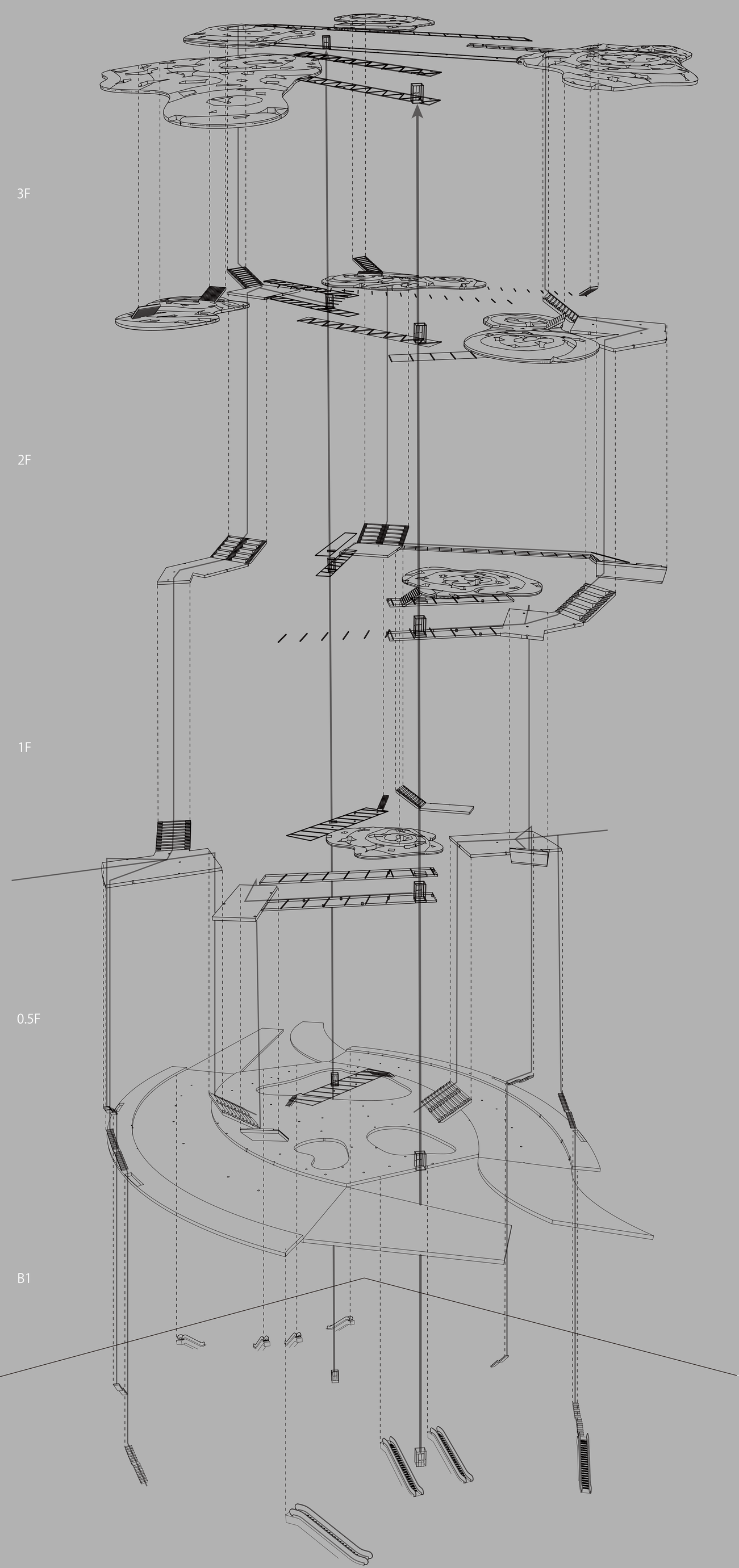


既存のバスターミナルは円形のバス動線が計画されている。円形である問題点としてその時点で自分がどこにいるのかがすぐに認識出来ない点がある。ターミナルを楕円にすることによって地図を見た際に現在地を瞬時に 2 択に絞ることができる。また、1 つの大きな穴と 2 つの小さな穴を設けることによって地上、地下からの視認のしやすさを実現している。

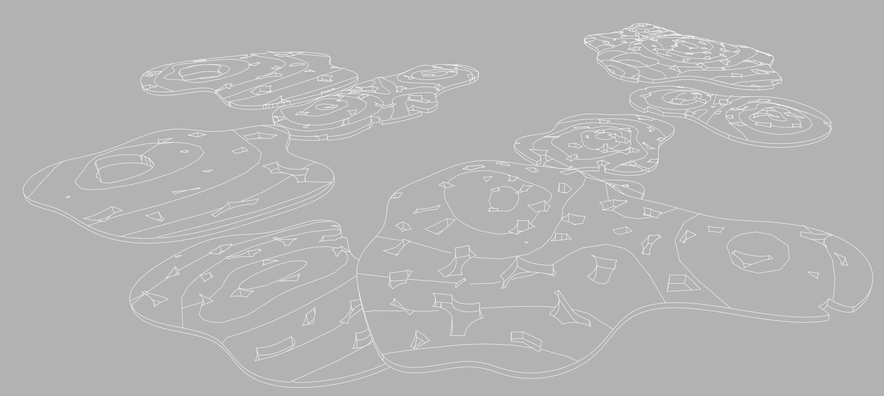
立面図 1:500
0
10
20
50
100m
断面図 1:500

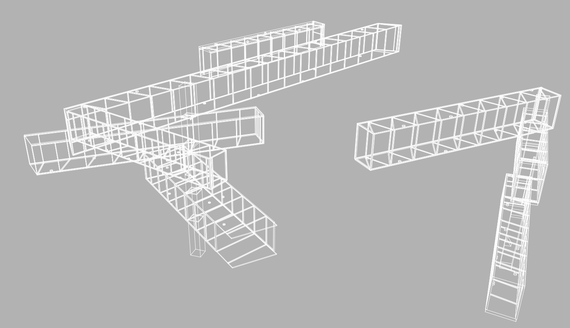
立面図 1:500
0 10 20 50 100m
断面図 1:500

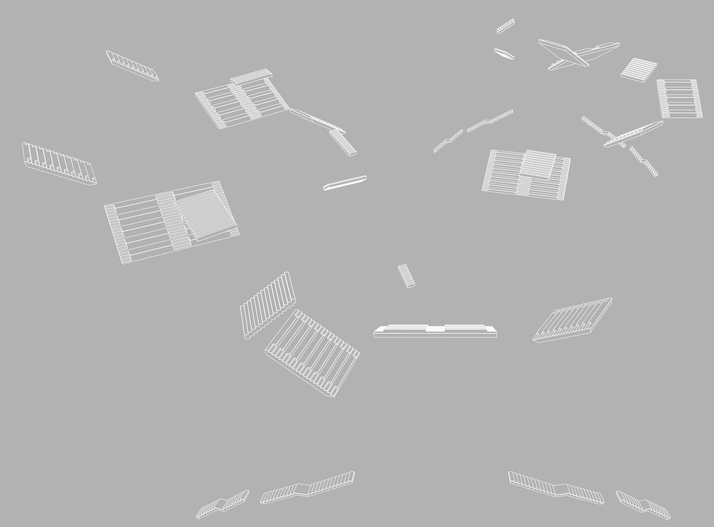
Zoning

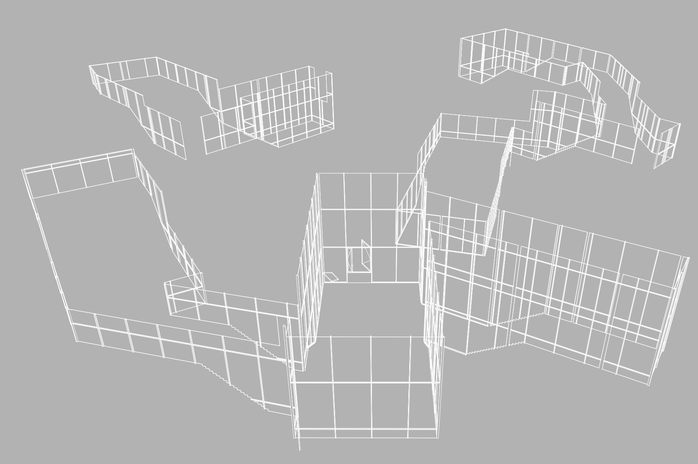


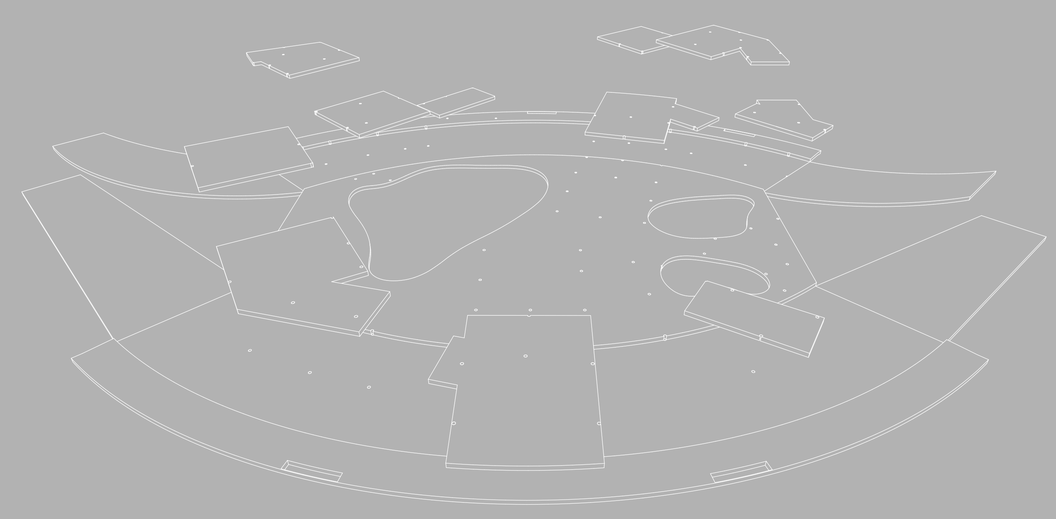
Element

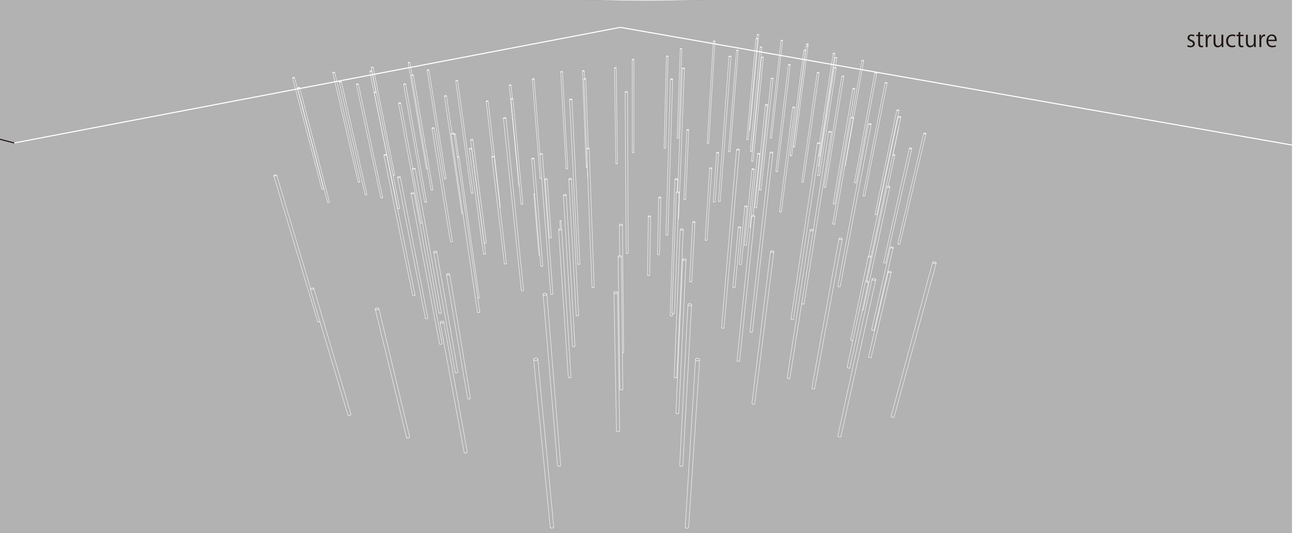

roof


glass passage


Stairs


curtain wall


slab


structure